審 査 結 果 の 要 旨

報告番号	乙 第 2949 号	氏名	下瀬 茂男
審査担当者	主 査	奥田 康司	(印)
	副主査	安階 勇太	(印)
	副主査	赤木 由人	(印)

主論文題目：Prognostic Impact of Transcatheter Arterial Chemoembolization (TACE) Combined with Radiofrequency Ablation in Patients with Unresectable Hepatocellular Carcinoma: A Comparison to TACE Alone using Decision-tree Analysis after Propensity Score Matching（中期肝細胞癌における肝動脈化学塞栓術併用ラジオ波の有効性：傾向スコアを用いた決定木解析にて肝動脈化学塞栓術との比較）

審査結果の要旨（意見）

近年、進行肝細胞癌の治療のトピックは分子標的薬や免疫チェックポイント阻害剤の臨床治験となっている。TACEなどのIVR治療は技術的習熟が要求され、積極的な臨床研究を行う施設は少なくなってきている。しかしながら、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害剤は当初期待していたほどの成績が得られていないのが現状である。この観点において、TACE、RFAの治療効果を向上させる本研究の臨床的意義は大きいと考えられる。また、従来よりIVR治療の比較試験はその客観的証明が難しくretrospectiveな検討は評価されなかった。しかしながら、本研究のように臨床ビッグデータに基づく傾向スコア解析によるretrospective studyがacceptされたことにより、今後の臨床研究のあり方に一定の方向性を示していただいたと考える。学位取得論文として十分な資格を有していると評価する。

論文要旨

肝細胞癌の治療において海外ではBCLC分類が用いられており、BCLC stage Bの標準治療は肝動脈化学塞栓術(TACE)である。またstage Aでの標準治療はラジオ波焼灼術(RFA)、手術である。BCLC stage BにおけるTACE治療の予後は満足できるものではなく、TACEに対して根治性の高いRFAを併用する事で予後を改善できるのではないかという趣旨で肝動脈化学塞栓術(TACE)併用ラジオ波焼灼術(RFA)とTACE単独における予後の比較を後ろ向き研究した論文である。420人の患者でTACE単独治療311人、TACE併用RFA治療109人の予後解析行った。両群の背景に差がある為、プロペンシティスコア用いて背景の差をなくし、予後について決定木解析を行った。BCLC stage A,Bにおいてどちらにおいても TACE併用RFAがTACE単独治療より予後が改善しており、決定木解析において TACE併用RFA治療が予後に関与する因子として抽出された。